

2025 年 12 月 1 日

報道関係各位

公益財団法人 笹川スポーツ財団

スタジアムや体育館などでの直接スポーツ観戦率は 26.2% 1 位はプロ野球 12.1%。Jリーグ、高校野球、Bリーグと続く

「スポーツ・フォー・エブリワン」を推進する公益財団法人 笹川スポーツ財団（所在地：東京都港区 理事長：渡邊一利 以下：SSF）では、1992 年から隔年で「スポーツライフに関する調査（スポーツライフ・データ）」を実施しています。運動実施の頻度・時間・強度からみた SSF 独自の指標である「運動・スポーツ実施レベル」をはじめ、スポーツ観戦率の推移や好きなスポーツ選手の順位など、国内のスポーツライフの現状を明らかにしてきました。

全国の 18 歳以上の男女を対象とした 2024 年の調査（調査期間：2024 年 6 月～7 月）では、過去 1 年間に体育館・スタジアム等へ足を運んで直接スポーツの試合を観戦した人の割合は全体の 26.2%と、前回の 2022 年調査から 6.9 ポイント増加しました。

調査結果のポイント

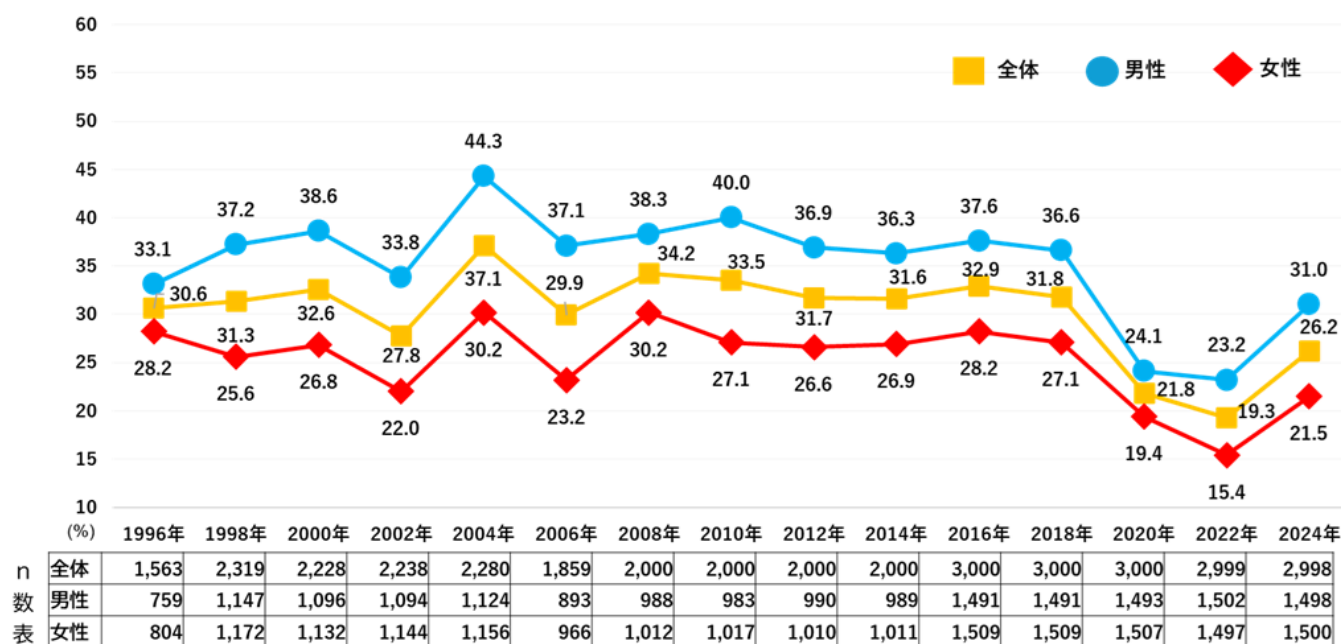
- 直接スポーツ観戦率は 26.2%と、2022 年調査から 6.9 ポイント増加
＜種目別＞ 「プロ野球（NPB）」が 12.1%と最も多い。次いで「Jリーグ」4.4%、「高校野球」3.5%、「プロバスケットボール（Bリーグ）」2.0%、「サッカー（高校、大学、JFL、WEリーグなど）」1.7%と続いた。
- テレビによるスポーツ観戦率は 79.0%と、これまでの調査で最も低かった。
＜種目別＞ 「プロ野球（NPB）」が 47.4%と最も高く、次いで「サッカー日本代表試合（五輪代表・なでしこジャパン含む）」36.4%、「高校野球」36.3%、「メジャーリーグ」35.1%、「マラソン・駅伝」33.6%であった。
- インターネットによるスポーツ観戦率は 24.2%となり、2022 年調査から 2.6 ポイント増加
＜種目別＞ 「格闘技（ボクシング、総合格闘技など）」6.6%が最も高く、次いで「プロ野球（NPB）」6.2%、「メジャーリーグ」5.3%、「サッカー日本代表試合」4.1%、「海外プロサッカー（欧州、南米など）」3.6%となった。

主な調査結果

1. 直接スポーツ観戦率の年次推移（1996～2024 年）

2024 年の直接スポーツ観戦率は 26.2%と、2022 年調査から 6.9 ポイント増加した。2018 年までは 30%台で推移していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い直接観戦の機会が減少し、2020 年は 21.8%、2022 年は 19.3%まで低下した。5 類移行後初の調査となった 2024 年は 26.2%に増加し、コロナ禍以前の水準に向けて回復傾向がみられる。性別にみると、男性 31.0%、女性 21.5%と男性の観戦率が 9.5 ポイント高かった。コロナ禍を経ても性差は変わらず、同様の傾向が続いている。

図 1. 直接スポーツ観戦率の年次推移 (1996～2024 年) : 全体・性別

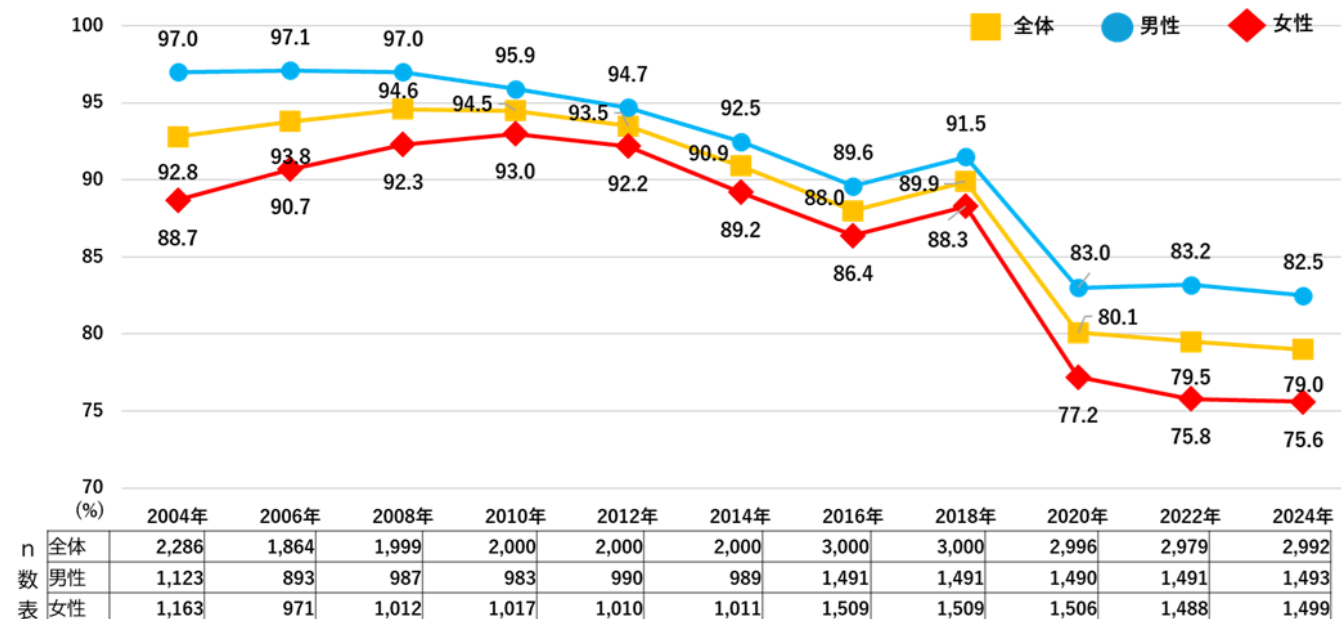


注) 2014 年までは 20 歳以上、2016 年以降は 18 歳以上を調査対象としている
 笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」(1996～2024) より作成

2. テレビによるスポーツ観戦率の年次推移 (2004～2024 年)

2024 年のテレビによるスポーツ観戦率は 79.0%と、これまでの調査で最も低かった。観戦率は 2004 年以降 90%前後で推移してきたが、2018 年から 2020 年にかけて 9.8 ポイント減と大きく低下し、以降は横ばいで推移している。性別にみると、男性 82.5%、女性 75.6%で、男性が女性より 6.9 ポイント高い。調査開始以来一貫して、男性の観戦率は女性を上回っている。

図 2. テレビによるスポーツ観戦率の年次推移 (2004～2024 年) : 全体・性別

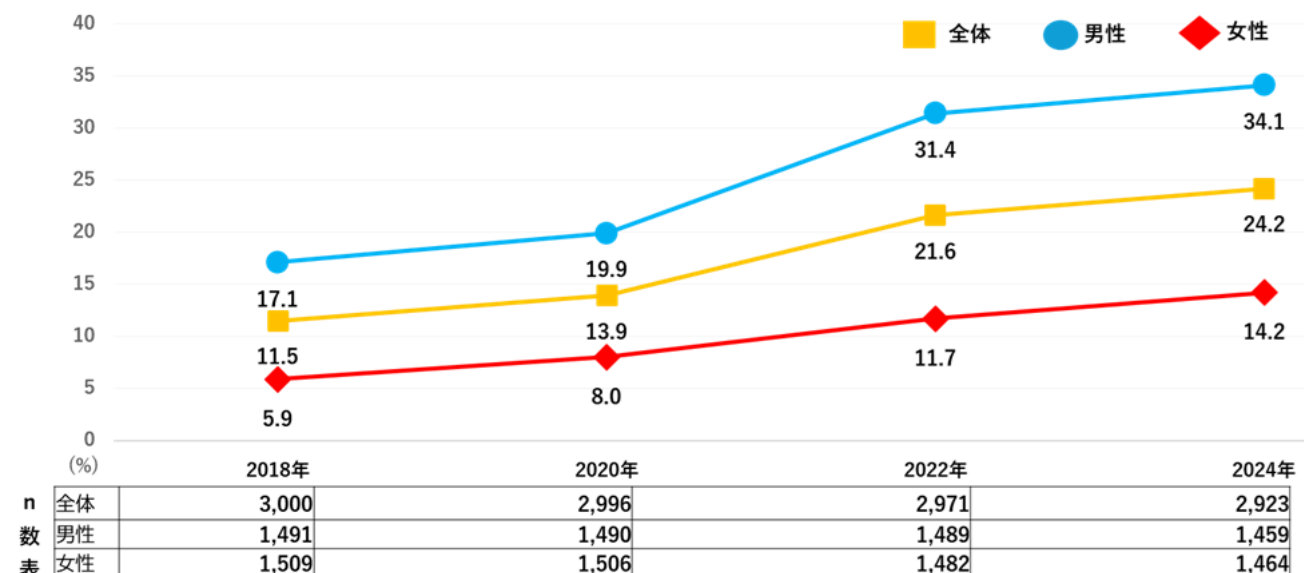


注) 2014 年までは 20 歳以上、2016 年以降は 18 歳以上を調査対象としている
 笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」(1996～2024) より作成

3. インターネットによるスポーツ観戦率の年次推移（2018～2024年）

2024年のインターネットによるスポーツ観戦率は全体の24.2%であった。2022年の21.6%から2.6ポイント増加し、調査を開始した2018年から上昇が続く。性別にみると、男性34.1%、女性14.2%であり、男性が女性より19.9ポイント高い。男性の観戦率は女性より高い水準で推移し、直接観戦やテレビ観戦と比べて大きな差がみられた。

図3. インターネットによるスポーツ観戦率の年次推移（2018～2024年）：全体・性別



笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」（2018～2024）より作成

4. 直接観戦したスポーツ種目

直接観戦したスポーツ種目をみると、全体では「プロ野球（NPB）」が12.1%と最も高く、次いで「Jリーグ（J1、J2、J3）」4.4%、「高校野球」3.5%、「プロバスケットボール（Bリーグ）」2.0%、「サッカー（高校、大学、JFL、WEリーグなど）」1.7%であった。

性別にみると、男女ともに「プロ野球（NPB）」（男性15.6%、女性8.7%）が最も高く、「Jリーグ（J1、J2、J3）」（男性5.4%、女性3.4%）、「高校野球」（男性4.5%、女性2.5%）と続いた。男性の4位は「サッカー（高校、大学、JFL、WEリーグなど）」2.2%、5位は「プロバスケットボール（Bリーグ）」2.1%であった。女性は4位が「プロバスケットボール（Bリーグ）」1.8%、5位が「バレーボール（高校、大学、Vリーグ、日本代表など）」1.3%であった。

5. テレビで観戦したスポーツ種目

テレビで観戦したスポーツ種目をみると、全体では「プロ野球（NPB）」が47.4%と最も高く、次いで「サッカー日本代表試合（五輪代表・なでしこジャパン含む）」36.4%、「高校野球」36.3%、「メジャーリーグ（アメリカ大リーグ）」35.1%、「マラソン・駅伝」33.6%であった。

性別にみると、男性は「プロ野球（NPB）」が55.1%と最も高く、「サッカー日本代表試合（五輪代表・なでしこジャパン含む）」42.9%、「メジャーリーグ（アメリカ大リーグ）」40.4%と続く。女性は「プロ野球（NPB）」が39.8%と最も高く、次いで「マラソン・駅伝」、「バレーボール（高校、大学、Vリーグ、日本代表など）」がともに33.8%であった。「プロ野球（NPB）」や「サッカー日本代表試合（五輪代表・なでしこジャパン含む）」、「メジャーリーグ（アメリカ大リーグ）」のテレビ観戦率は男性が女性を大きく上回る。一方で「バレーボール（高校、大学、Vリーグ、日本代表など）」は女性が男性より9.2ポイント高い。

6. インターネットで観戦したスポーツ種目

インターネットで観戦したスポーツ種目をみると、全体では「格闘技（ボクシング、総合格闘技など）」6.6%が最も高く、次いで「プロ野球（NPB）」6.2%、「メジャーリーグ（アメリカ大リーグ）」5.3%、「サッカー日本代表試合（五輪代表・なでしこジャパン含む）」4.1%、「海外プロサッカー（欧州、南米など）」3.6%となった。

男性は全体と同様に「格闘技（ボクシング、総合格闘技など）」が10.9%と最も高く、「プロ野球（NPB）」9.5%、「メジャーリーグ（アメリカ大リーグ）」8.2%と続いた。女性は「プロ野球（NPB）」が2.8%と最も高く、次いで「格闘技（ボクシング、総合格闘技など）」「メジャーリーグ（アメリカ大リーグ）」が2.4%であった。

【「スポーツライフ・データ 2024」調査概要】

調査内容：運動・スポーツ実施状況、運動・スポーツ施設、スポーツクラブ・同好会・チーム、スポーツ観戦、スポーツボランティア、日常生活における身体活動、生活習慣・健康 他

調査対象：全国の市区町村に居住する満18歳以上の男女3,000人（男性：1,498人、女性1,502人）

地点数：300地点（大都市90地点、人口10万人以上の市122地点、人口10万人未満の市64地点、町村24地点）

調査時期：2024年6月7日～7月7日

※スポーツライフに関する調査報告書「スポーツライフ・データ 2024」に関するプレスリリースは2025年4月にご案内済